

大原社会問題研究所五十年史

II 創立当初〔一九一九～二二年〕

河上、長谷川両氏の入所問題と助手の辞職

この年の人事問題として重要なものは、長谷川如是閑、河上肇両氏の入所に関する経緯と、助手の辞職である。まず河上氏の入所問題をかんとんに記しておきたい。河上博士はすでに一九二〇年以來研究所の評議員となって来たが、その就任前にも、京大を辞して研究員となる意向もあるやに伝えられ、高野所長も大原氏の諒解を得てその実現に努力したが、ついに評議員たるに止まったのである。さて、研究所の法人となるにおよび、河上氏ら全ての評議員は自然解職となったことは前述の通りであるが、この前後から再び河上氏を研究員として迎え入れる交渉が、高野、櫛田両氏を中心におこなわれた。

長谷川氏は、この当時、すでに大阪朝日を辞して雑誌『我等』に拠り論陣を張っていたが、高野氏は河上氏と同時に長谷川氏にも研究員として入所されたいと勧誘した（一〇月三日）。しかし河上氏は同月二〇日高野、櫛田両氏を訪問し、研究員となるのは六ヵ月後にしたいと、就任延期を申入れた。その後河上氏の入所問題は容易に決定せず、翌一九二三年秋には、米田庄太郎、河田嗣郎氏を研究所の嘱託にすることを条件に、自らは委員、研究員に就任するも可なりとの意向を表明したりしたが、高野、櫛田氏らはこの条件を容れず河上氏の入所はこの後も遂に実現するにいたらなかった。

長谷川氏は河上氏の態度がきまらず延びのびとなっている間に、単独に嘱託として就任した（一九二二年一〇月二五日）。また同氏の紹介で小泉鉄氏が嘱託として図書整理の仕事に従った（二二年一〇月より翌年末まで）。これと同じ頃、山名義鶴氏は研究員を辞して嘱託となった（一〇月一六日）。

研究所の助手は、前述のように年鑑の編集執筆や研究調査翻訳にあたり、また主として高野氏の指導下に専門書の講読などをやっていた。しかし助手の研究は必ずしも順調にすすまず、ついに一月二七日、高野所長は林、河西、山村、八木沢、丸岡氏らの助手に対し辞職を勧告し、その承諾を待ってこれら諸氏の就職の世話を始めたのである。そして年末には丸岡氏の東洋経済新報社就職がきまり、河西氏の立教大学就任もほぼ確実となった。翌二三年一月二七日には前記五氏のほか植田たまよ女史をふくめて助手送別会が開かれた。その後各氏はそれぞれ大学その他の方面に就職した*。植田たまよ女史はこの辞職問題の圏外にあったが、この時一緒に辞職して二三年三月、アメリカに渡った。またドイツ滞在中の宇野弘蔵氏も一応助手を辞することになったが、今後は嘱託として滞独中、研究所の図書蒐集の仕事に当ることになった。

*のち林氏は同志社大学、河西氏は立教大学、山村氏は関西大学、八木沢氏は中央大学にそれぞれ就職した。

